1才6カ月児歯科健診のシステムに関する研究

分担研究者　深　田　英　朗（日大・歯・小児歯）
研究協力者
及川　清，加我　正行（北大・歯・小児歯）
神山紀久男，真柳　秀昭（東北大・歯・小児歯）
桧垣　旺夫，内村　登（神歯大・小児歯）
長坂　信夫，三浦　一生（広大・歯・小児歯）
吉田　穣，塚本　末広（福歯大・小児歯）
甘利　英一，野坂久美子（岩医大・歯・小児歯）
赤坂　守人（日大・歯・小児歯）
祖父江鎮雄，下野　勉（阪大・歯・小児歯）
西野　瑞穂，山口　佳克（徳大・歯・保存）

1. はじめに

1才6ケ月児健診の歯科健診は、特に齲蝕が重視されている。この時期の齲蝕問題は単なる検診のみに終ることなく、この時期以後に急増してくる齲蝕罹患の予防のための保健指導が重視されねばならない。この時期の齲蝕発生は、食生活を中心とした保護者の育児姿勢に大きく影響されて発生するため、齲蝕は育児の反映そのものであるといわれる所以である。1才6ケ月児健診の目的の1つに、この時期の食生活、しつけ等の生活指導がある。齲蝕状態を知ることによって、育児上の問題点を知ることができ、また齲蝕予防はこの時期の正しい生活指導によって解決される。このような観点から、歯科健診のあり方は1才6ケ月児健診全体のシステムの中で、一体として考えられるべきものである。また、口腔歯に表われる様々な異常、奇形を発見し、観察することは、1才6ケ月児健診の目的の1つである。軽症の心身障害、外表奇形の発見に役立つ情報を提供することにもなり、この面からも歯科健診の意義と全体の健診との一体化が図られるべきである。歯科健診のスタッフとして必要な歯科医師、或いは歯科衛生士の動員は、現状では地域により格差が著しく、そのための歯科健診システムが地域によりかなり異なっていることが考えられる。今後の1才6ケ月児歯科健診を充実、発展させるためには、市町村の状況に応じた健診システムが図られる必要があろう。

1才6ケ月児健診が昭和52年から全国的規模で開始して以来、現在、歯科健診も多くの市町村で既に実施されてきている。しかし歯科健診がどのような状況で実施され、どのような問題点があるのか、全国的な地域別の実態調査が報告されていない。今回の調査報告は、各地域の研究協力者の協力を得て、1才6ケ月児歯科健診の現状把握をし、今後の地域の状況に合った歯科健診のシステムを検討する第1歩とした。

2. 研究方法

別報のし1才6ケ月児歯科健診の評価に関する研究」報告と同様に、札幌市、盛岡市、仙台市、東京都内、横須賀市、大阪市、広島市、徳島市、福岡市に在る歯科大学の小児歯科教室が検診要員となって実施している1才6ケ月児歯科健診のフィールド9ケ所を対象にした。フィールドは各々の市の市内或はは近郊にある住宅地域である。なお、これらのフィールドは別報の研究目的のために、新たに開始したフィールドと、既に以前から1才6ケ月児歯科健診を実施していたフィールドが含まれている。各々のフィールド責任者に以下の項目についてのアンケートに記入してもらい、検討した。

1）各フィールドの総合口　2），年間出生率（人口千対）3），1才6ケ月児歯科健診来所率、4），3才児歯科健診来所率 5），1才6ケ月児歯科健診月健診回数　6），1才6ケ月児歯科健診の1回受診者数　7），歯科健診のスタッフ構成、8），歯科健診の時間、9），歯科健診時の個別指導 イ），実施しているか　ロ），1人当り時間、ハ），担当者　10），集団指導　イ実施しているか、否か、ロ歯科単独か、合同か　ハ所要時間　ニ担当者、

ホ)受講人数　ヘ)受講率　11)，事後処置　イ)実施しているか、否か、ロ)予防処置　ハ)保険指導的個別指導、12)，健診形態

3. 研究結果ならびに考察

研究結果は表に示した。1才6ケ月児歯科健診の受診率は各フィールドも全体的に高い。地域によっては3才児歯科健診よりも高いところもみられる。大阪、広島、福岡などのフィールドが低いのは、別報の研究目的のために開始したフィールドなど、特殊な事情があり、地域の自治体が中心となっていないところは、受診率が低下している。1才6ケ月児歯科健診の1回の所要時間は、2～3時間が多く、半日単位が多い。1回の受診者数はかなりフィールドにより差が認められるが、一人の検診者につき、20～30名が普通である。従って視診による口腔診査と指導を含めて、一人当りにかける健診所要時間は6～7分である。一般に、1才6ケ月児歯科健診では、口腔診査と同時にアンケート法による育児環境調査などの資料を参考にして、個別的な予防指導が行なわれているが、本対象のフィールドは全て実施している。その所要時間は1人当り10分から1～2分と差があるが、平均2～5分である。個別指導は検診者の歯科医師が行なうことが多いが、歯科衛生士が行なっているところも多い。集団指導は半数のフィールドが実施している。大半が歯科単独に集団指導をしているが、1フィールドのみ合同の集団指導をしている。1才6ケ月児歯科健診で、大きな問題は健診後の事後措置をどのようにするかであろう。地域によっては1才6ケ月児にかなり齲蝕罹患を認めるところがある。また歯科健診は、1才6ケ月児を起点として、3才児検診に継続する定期的管理システムをつくる必要がある。この点からも健診後の事後措置は重要になってくる。今回の調査対象のフィールドは、ほとんどが実施している。事後措置の内容としては、健診後希望者に再来所してもらい、フッ素塗布　或いは齲蝕歯に対し進行抑制剤（フッ化ジアミン銀）塗布などの予防処置を実施しているフィールドが半数認められる。実施場所は大半が保健所のクリニックで、歯科衛生士が行なっている。

1才6ケ月児の歯科健診は、単独に行なわれるよりも、全体の健診の流れの中で実施されることの方が、特に保健指導の面で望ましいことは明らかである。今回の調査では、歯科健診のみ単独で実施されているフィールドが3ケ所あり、他のフィールドは全て他の健診と併行して、1回方式歯科健診が実施されていた。

今回の1才6ケ月児歯科健診システムに関する調査については、別報「歯科的にみた1才6ケ月児の実態について」の研究を目的としたフィールドを調査対象にしたため、実際の1才6ケ月児歯科健診の実態と幾分異なった面もみられたが、歯科健診の状態をある程度知ることが出来たと思う。今後更に多くの地域のフィールドについて、口腔診査、予防指導の内容、全体の健診システムの中での歯科健診の流れ、事後措置等について実態を調査し、1才6ケ月児歯科健診のあり方を検討していく予定である。

	仙台市	盛岡市	横須賀市	東京都内	大阪市	広島市	徳島県石井町	福岡市
1) フィールドの総人口	627000	226000	130000	194000	220000	36000	24600	376000
2) 年間出生率（人口千対）	16.8	15.4	13.8	12.7	19.8	18.0	15.9	17.5
3) 1才6ケ月健診来所率(%)	83	98	91	84.5	16	34.4	90.6	20.3
4)3才児検診来所率 (%)	86	86	90	74.8	60		90.7	19.4
5) 1才6ケ月健診回数(月)	4	4	1.5	3	1	1	1	1
6) 1才6ケ月1回の受診者数(人)	40	80	100	55	60	20	30	70
7) 1才6ケ月歯科健診のスタッフ	Dr 5 事務1 DH 4	Dr 5 DH 3	Dr 2 DH 2	Dr 3 DH 4	Dr 4	Dr 4 その他5	Dr 7 DH 2	Dr 7 DH 2
8) 歯科検診の時間	約3時間	約2時間	約3時間	約3時間	約1時間	約3時間	約2時間半	約3時間
9)㋑個別指導しているか否か	○	○	○	○	○	○	○	○
㋺個別指導の時間（1人）	10分	約2分	1～2分	2～3分		5分	5分	2～3分
㋩個別指導の担当者は	歯科医 Dr	Dr ,DH	DH	Dr	Dr ,DH	保健婦	Dr	Dr ,DH
10)㋑集団指導しているか否か	○	×	×	○	○	○	×	×
㋺集団指導は単独か合同か	単			合同	単	単		
㋩集団指導の時間は	15分			各科10分	20分	1時間		
㋥集団指導の担当者は	DH			DH	その他	Dr		
㋭集団指導の1回の受講人数	8～10			20	15	10		
㋬集団指導の受講率(%)	100			100	60	別の日に 60		
11)㋑事後措置しているか否か	×	○	○	○	○	○	×	○
㋺予防処置	×	○	○	○	×	○	×	×
㋩保健指導的個別指導	×	×	×	○	○	○	×	×
12) 健診形態	歯科のみ	1回	1回	1回	歯科のみ	歯科のみ	1回	1回

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1.はじめに

1才6ケ月児健診の歯科健診は、特に齲蝕が重視されている。この時期の齲蝕問題は単なる検診のみに終ることなく、この時期以後に急増してくる齲蝕罹患の予防のための保健指導が重視されねばならない。この時期の齲蝕発生は、食生活を中心とした保護者の育児姿勢に大きく影響されて発生するため、齲蝕は育児の反映そのものであるといわれる所以である。1才6ケ月児健診の目的の1つに、この時期の食生活、しつけ等の生活指導がある。齲蝕状態を知ることによって、育児上の問題点を知ることができ、また齲蝕予防はこの時期の正しい生活指導によって解決される。このような観点から、歯科健診のあり方は1才6ケ月児健診全体のシステムの中で、一体として考えられるべきものである。また、口腔歯に表われる様々な異常、奇形を発見し、観察することは、1才6ケ月児健診の目的の1つである。軽症の心身障害、外表奇形の発見に役立つ情報を提供することにもなり、この面からも歯科健診の意義と全体の健診との一体化が図られるべきである。歯科健診のスタッフとして必要な歯科医師、或いは歯科衛生士の動員は、現状では地域により格差が著しく、そのための歯科健診システムが地域によりかなり異なっていることが考えられる。今後の1才6ケ月児歯科健診を充実、発展させるためには、市町村の状況に応じた健診システムが図られる必要があろう。